

安息日問題

雨 貝 行 磨

安息日を覚えて、これを聖なるものとして保持せよ。6日のあいだは働いてあなたのすべてのわざをせよ。7日目にはあなたの神、主の安息であるから、なんのわざもしてはならない。あなたのむすこ、娘、奴隷、女奴隷、家畜、またあなたの門のうちにいる在留異邦人といえどもそうである。主は6日のうちに、天と地と海と、そのなかのすべてのものを創って、7日目に休まれたからである。それで主は安息を祝福して聖とされた。

出エジプト記20：8～11

私訳

ある安息日に、イエスは麦畑のなかをとおって行かれたことがあった。そのとき弟子たちが、歩きながら穂をつみはじめた。すると、パリサイ人たちがイエスに問うた。「いったい、彼らはなぜ安息日にゆるされぬことをするのか」そこで彼らにいわれた「あなたがたはダビデとその供のものたちが食物がなくて飢えたとき、ダビデがなにをしたか、まだ読んだことはないのか。彼は大祭司アビヤタルのとき、神の家にはいつて祭司以外は誰も食べてはならぬ供えもののパンを食べ、共にいる人々にも与えたのだ。安息日こそ人間の生命のためにできたのであり、人間が安息日のためにあるのではない。だから人の子は安息日の上にも主なのである。

それから、またある会堂に来た。するとそこに片手のなえた人がいた。人々は彼が安息日に癒されるかどうかうかがっていた。それによって告発するためである。するとイエスは、そのなえた手の人に向かって言われる。「立ちあがれ、まんなかに出て来なさい」。人々にむかって言われる。「ひとは安息日に善いことをしてよいのか、それとも悪いことをしてよいのか。一つの生命を救うのか、それとも殺すのか」しかし人々は黙っていた。そこでイエスは怒りに満ちて人々をみまわし、彼らと心のかたくなさを深く悲しみ、そのひとに言われる。「その手をのばせ」。

そこで彼が手をのばすと、その手はもとどおりになった。するとパリサイ人たちは出てゆき、ただちにヘロデ党の人々と、なんとかしてイエスを殺そうと相談した。

マルコ福音書 2：23～3：6

私訳

「安息日を覚えて、これを聖なるものとして保持せよ」出エジプト記20章8節。この安息日規定は、「わたしはヤーウエ。あなたをエジプトの地、奴隸の家から導き出した、あなたの神である。あなたは、わたし自身に加えて、他の神々をもってはならない」とする神の自己宣言と神の主権の宣布を貫徹する最も具体的規定である。他の戒めから独立して伝承され、他の法文集成において後代に組成されたものではなく、むしろ遊牧時代にまで遡及するJの伝承である。ただし、「安息日を覚えて、これを聖なるものとして保持せよ」が中心的始源的主題であって、E典に継承され、9～10節が申命記編集加筆、11節は祭司的加筆として二次的付加的であると考えられる。

安息日とは、7日間の生活のなかで他の6日間とを区別することを要求する。6日間は労働し、7日目には「なにもしてはならぬ」。

神が創りたもうた世界、それをよとした。そして神が導いた荒野でひとは労する。しかし神が創り、導き、この管理と委託に全的に応えるには、ひとはあまりに小さい。それでも、ひとは労しつづける。所せんひとの世界は消耗の激しい舞台であるのか。労苦のみが「日毎の糧」か。

イスラエルを含む古代オリエント世界は神によって彷徨せしめられる荒野であった。「土」はたがやせても「水」に不足していた。「光」はあったが「養分」にこと欠いていた。踏んでも、たがやしても虚しさがつるばかりの、神によって与えられた現実がある。しかし、ひとは労する。もうひとたび、あと一回だけ。そうすれば、なんとか見とおしが得られそうだ。

だが、それにもかかわらず、つぎの7日目には決して労してはならぬ。「あなたの息子、娘、あなたの奴隸、女奴隸、家畜、そしてあなたの門のうちにいる在留異邦人といえども」。「神が安息日を祝福して、これを聖別したからである」。

これらはすでに 神が 人間の生を祝福し、労働と休息を与えるよう配慮していることを明きらかにしている。神は人間に時を与えて、そこで生かし、絶対の虚無、底なしの深淵にではなく、天をあおぐ恵みのうちに憩わしめようとしておられる。「汝ら労せよ、そして憩えよ」これが神の主権の宣布である。憩え、休めと宣告されたとき、それを人間は受けとらねばならぬ。なぜなら、ひとは労働なしに生きえないと共に休息なしに生きることはできないからである。

永続的生存は、神の時にはない。また、再び同じ生涯をくりかえすことはできない。ひとたびの恩恵のちに、神の計画のうちに生かされ、神の約束のうちに召される (*providentia et praedestinatio*)。地上の放浪者として、遠くあっても(創4:14)、なにものにもまして受けとるべく自らをつくりかえねばならぬ。「汝は、汝に向けて我らを創り給いしゆえに、汝にあつて休息するまで、我らの心は決して安きをえない。」(*Augustinus*)。

安息日規定は、神の計画と予定、配慮と約束にあつて、すべて生けるものに公平に要求された規範であつた。

この起源に関する最近80年間の諸学説は多種多様である。問題は、安息日の性格、つまり、規則正しく7日をもって反復させる時間の経過に7日目を休むということが、どこに由来するか。旧約以外のオリエン特世界にあつたのか。これについて左近淑氏(東京神学大学教授・旧約聖書学)のすぐれた論文に支援されよう。

イ. 言語学的解釈にはおのずから限界があるが、後述する 7の両数形 *sāb°an*+期間を示す女性語尾 *-tu* に関連する *šabattu* に由来するか。

ロ. 暦による説明 なかでも (1)土星の日仮説もその変形としてのケニ人説。これは土曜の由来 (*saturday*) の土星崇拜に起源をもつとするが、古代において実証することが、困難である。

2) バビロニア・アッシリア大陰暦の〈禁忌の日〉説。今日ではバビロニア一般に、1, 7, 9, 14, 19, 21, 28, 29, 30という特定の階層の者に行動の制限があつたことが知られている。しかしこれを7日の反復として説明するには全体的に調和がとれない。むしろ捕囚期以来安息日はヤーウエとほ契約のしるしとして強化されたとみるべきであろう。

(出エジプト記31:14, 35)。

3) *šabuttu* 説。月の前半と後半とを分けるものとする。しかしこれは一定の日を確立することができない。

4) *ḥamūstu* 説。これは5日間をあらわす語であり、ユダヤ暦では1年は7つのハムシュトウ (50×7) +うるうの15日間より成る。これが前述の *šabuttu* であるが、これで2分されたとする。しかしこれでは、6日目とくざり7日目に安息とすゆことができない。ハムシュトウは5日間以外の意味がないからである。

ハ. 発展論的説明として、満月の日であつたものが、後に7日目に移

行したと考えるが、これを旧約文献によって実証することができない。

二、社会学的説明。社会生活のリズムとの関わりで休日として用いたとする。それが、古代イスラエル宗教の倫理的合理性の展開の実例とみる。しかし、安息日そのものが前提となっているのであり、倫理的合理性が前提となっていたのではない。

かくて、7日目の安息日というのは、イスラエルの民としてのその始源からすでに存在していた独特のものであって、決して他に例をみることはできない。

イスラエルの安息日の特質は、週の第7日目であること、7日の週に分割する制度は月令や呪術的禁忌ではなく、いかなる時も神の計画と約束として生起するなかで、7日毎の安息、すなわち日常従事していることを中断することである。人間と彼らが営む共同体が適当に休むことが生理的にも必要であるからではなく、ただ神の戒めによるのみである。そして、創られた世界が、その終わり (finis) へ向けて生起しつつ終末論的に完成し、祝福をうけるのである。

安息日規定は、捕囚以後、禁令的側面が決疑法化し、厳格となり (ネヘミヤ13:19~22) ついには安息日の禁令を破ることよりも、外敵の攻撃に任せ (I マカベア 2:29~38)、ヨセフスは 로마のポンペイウスのエルサレム攻略に際しても、安息日にはなにもせず、手をこまねいたことを記録している (ユダヤ古代史14, 4, 2)。ラビ・シメオン・ベン・メナシヤの言葉として (A D 180年頃)、出エジプト記3:13~14の注解に「安息日を守るべし、安息日は汝らにとって聖なるものとしてこれこそイスラエルのためにつくられたものであり、異邦人のためのものではない」(Mechlta Ex 31:13)。後期ユダヤ教のヨベル書2:31では「万物の創造主はそれ (安息日) を祝福した。しかし主はこの安息日を守るべくすべての民族、国民を聖め給うことをせずイスラエルのみを聖め給うた」とし、神の時、その計画と約束を生きるべく命じられたイスラエルとその地に属する奴隷、家畜、在留異邦人にもこれにあづかるべき無二の責任を求めた。

イスラエルに属するものはすべて、生理的休息の要求にもとづくのではなく、神の戒めにもとづいて休息すべく定められた。すべてのわぎを中断する。たとえそれが、いまひといきの完成を直前にしていたと思わ

安息日問題

れるときできえも、すべてがもとのもくあみになってついえさをうとも、7日目に休む。人間の、人間によるわざによって、神の計画と約束を完成させることはできない。神はご自身の主権によって、その時を完成する。そこに人間の祝福がある。

しかし、〈安息日遵守は容易ではなかった。………疑いもなく論争の中心となったのは異邦人キリスト者にとって、安息日を守ることは無理であった〉(モール:新約聖書の成立 p.73)パリサイ人は、これを遵守し、またそうしようとしていた。彼らはモーゼの律法を歴史的現実的に継承するものとして自負し、またひとびとからもそのように評価されていた。神殿礼拝以上に、割礼と安息日遵守とは、ユダヤ人にとって、ユダヤ人であることの現実的な証しであった。

このような背景のなかで、イエスは安息日問題に対する態度をイスラエルに示した。イエスは安息日に治癒を行っている。片手のなえた人を癒し(マルコ3:1~6とその並行記事)、からだの曲った女を癒し(ルカ13:10~17)水腫症の者をいやす(ルカ14:1~6)。これらの病む者たちは、安息日が終了するまでその治癒を延期しても、生命といたくそこなうことはない。それにもかかわらず、「安息日に」治癒する。マルコ福音書は弟子たちが麦の穂をつむふるまいも、イエスの言葉によってそれを擁護している。これらの福音書伝承の背後に、イエスはあきらかに安息日「違反」を知っていて、安息日に治癒を行ったという史的出来事がある。イエス自身、そのふるまい、ことばと行いにおいて、安息日の規定が生み出す社会的現実に対してきわめて批判的であった。そのふるまいは、神の計画と約束を明確に祝福として自覚して大胆に人間をその本来的生命へ回復させることを生みだしている。

当時、麦の穂を手でつんだことは他人の畑に鎌を入れたことと同じにみなした。安息日違反をマタイ福音書はこれを「飢えて」いた(12:1)と設定している。しかし、安息日規定をすりぬけることはできない。

パリサイ人によって問われた。安息日には収穫は禁ぜられ、種をまくこともゆるされない。火をたきつけることもを旅にでることも禁止された(使徒行伝1:12, マタイ24:20~29)。更に、それらの必要のための

準備の行為：準備そのものも禁じられた（マルコ15：42）。荷物もちあげたり、運ぶことが禁じられた。安息日に子供はだきあげてよい。しかし、その子が手に石をもっていたら、石は荷物か。病めるものは、その生命にかかわるなら、悪化させないように手をかすのはよいが（マタイ12：11以下ルカ14：5）治癒をほどこし快方に向かわせてはならない。

ヨセフスによれば、ヨハネ・ヒルカノス王の時（134～104）において、パリサイ人は、イスラエルの伝統に忠実なものたちとして、きわめて優力な勢力として存在し、学者 *sôperîm* 知者 *h^akāmîm* とよばれておもんじられていた。王を自称する人間に対してよりも、律法に忠実であることによって、いわば反体制的勢力のひとつとなり、権力の側も彼らを忌避し、彼らは分離し、孤立した。37年 BC ヘロデがエルサレムを占領した時、サンヒドリンのパリサイ人45人が殺害された記録があるように決して少数派ではなかった。孤立してなお一大勢力としてエルサレムにあった（ヨセフスによれば20,000人をこえていたという）。

このようにパリサイ人は、現実の政治支配者、権力者をこえて、十戒：律法に忠実であり、民衆にあっては、相互に兄弟（*habērîm*）でありと勧告し、助言をしていた。

かくて、出エジプト以来、イスラエルに対する神の計画と約束の出来事を語りつづけ、イスラエルの民を神の民として保持しつづけ、今日的にそれを神殿よりもシナゴークにおける礼拝において回復せしめようとしていた。シナゴークでこそ、ひとびとはその生活の領域にあって、神の聖なる民（出エジプト19：6）として選ばれていることを経験したのであって、なにもものかから阻害する要因や事件をもたらすものではなかったという面を否定することはできない。

イエスはその初期に、安息日にシナゴークにおいて宣教活動をしている（マルコ1：21、3：1、6：2、マタイ12：9、13：54、ルカ4：16、6：6、13：10、ヨハネ6：59、19：20）。

イエスにとっても、パリサイ人たちにとっても、安息日のシナゴークこそ（ヤーウエとイスラエルとの間に厳存する、聖い交わりの特別な現実化）なのである。

かくて、イエスをのぞいては、パリサイ人たちこそ、イスラエルの伝統継承 それに対する忠誠をみずからの歴史的任務であることを自覚し

安息日問題

ていた。ガリラヤ出身のイエスとその集団は、サドカイ人たちでなく、シナゴークにおける宗教活動とその聖書解釈からみれば、パリサイにこそつらなるひとびとではないかと考えても不思議ではない。彼らをひとびとは、ヨハネの弟子とも、エリヤともいい、予言者たちのひとりともいっている。パリサイ人たちにとって最も関心のある集団であって、懸念や猜疑ではあるまい。

その彼らが、麦をつんだのである。通りすがりに、空腹のためにつんだことはゆるされる（申命記23：25）。しかし、安息日なのである。すべてにまさって安息日規定が問題なのである。

それでは、安息日にシナゴークで礼拝をすればよいのか。これにただちに答えようとするのがマルコ3章である。麦畑でも、シナゴークでも問題的である。それゆえにペリコーペは2章23節から3章6節がひとつの主題、安息日問題をめぐってなされている。

ダビデの故事は、アビヤタルではなく、アヒメレク（Ⅰサムエル21：2～7）Ⅱサムエル8：17（cf Ⅰ歴代24：3，6，21）にアビマタルの子アヒメルクとなっている。歴史的にはアヒメルクの子アビヤタルである（Ⅱサムエル22：20）。この事実誤認は、しばしばなされ、論争にあたって、全体の主題の展開を阻害することはなかったと思われる。しかし、伝承史的には、D、Wの写本ではこれを削除し、マタイもはづしている。しかも、そこでは弟子たちが飢えていたとする。もはやここにイエスのことばの大胆さをみてとることができない。

「安息日は、人が生きるためにつくられたのだ」。ひとを生かすめるためにある。人間は、その生をみずから決意して開始したのではない。だから目的はないのか。神が予定し、創り、育て、導いている。みずから設計図をひき、施行監督をしても、それはそれとしては完成しない。とすれば絶望か。神が導き、改革する。

モーゼは、その生活の革新を神によって与えられた。「わたしはあなたをパロのところへつかわし、わたしの民、イスラエルの民をエジプトの地、奴隷の家から導きだす」「わたしは必ずあなたと共にいる」。その名をなんといわれるのか」と尋ねたことに対して「わたしはあらしめるもの'ehyeh ster 'ehyeh」。人間とは「生かされている（nephesh chayyah）」（cf Ⅰコリント15：45 Ⅱコリント13：4）。神はこのよ

うに現代的・将来的に働き給うのである。〈その働きは過去の完了しているのではない〉(有賀鉄太郎：キリスト教思想における存在論の問題 p. 190) 耳をかたむけ、語りだし、ひとをして神の前に応答するものとしてたたしめ、それを孤立無縁とすることなく、また自主的決断の放従につきはなすのでもなく、人間をして人間とする基本的な定め、支え、神ともにいます祝宴の告知である。(ドゥ・ヴォ：イスラエル古代史p.494) 「まず人が神によって置かれ、立てられ、受容され、要求されている事実があり、そのために自覚的に従うか否かが：生命と死への分かれ道なのである。」(八木誠一：キリストとイエスp.69, 71)

マルコ3章の冒頭 *παλιτιν* は、主題を継続的に展開する(2:1, 13, 3:20, 4:1, 5:21)。2節の主語は前述をうけて、無人称三人称複数とする。ここではパリサイ人たちも、一定の意図、告発するという動機をもっていたことをあきらかにし、イエスもまた、安息日禁令に関する論争として対応している。もはやイエスの活動を病氣治癒という奇跡物語でなくしている。これは安息日に治癒したことではなく、安息日をどう考えるか、そしてその思想でどう生きるか、現実をどのように拓りひらくかが問われるのである。「生きることと殺すこと」これは二律背反である。中立はない。マタイもルカも、この根源的ともいう動機をうしなっている。ヨハネは、父なる神と同じ権成を与えられたイエスの権威を語る。しかし、マルコはそこで現実的に問われている、のがれることのできない事態、生か死かを問うものとしてのイエスをあきらかにする。

安息日においてイエスにとっては「なにもしてはならない」とはシナゴークで「生きることをえさせること」。この道こそ *vita passiva* であり、*vita comtemporalis* である。安息日にシナゴークにゆくことは、神の歴史的救済行為「きけ、イスラエル」を共同して確認し、未来へ向けて身をそなわせることであった。未来は神が約束したもうゆえに希望であって不安はない。

人間が生きては偶然ではない。神の計画と約束のうちにある。とすれば勢いにまかせて生きることはできない。(神の計画こそが実現する。) 自分の計画は中断するであろう。

安息日問題

「年若い者も弱り、かつ疲れ、
壮年の者も疲れはてて倒れる」(イザヤ40:30)

人間は神によって導かれた 不毛の荒野をたがやさねばならぬ、「6日間働け」と。そこが神の国だ。そして7日目に「休息せよ」という。荒野のままであっても「憩え」という。そこが神の国である。

人間の生命体は *vita activa* と *vita passiva* がある。そのすべてにわたって、神の主権が確立されていなければならぬ。神によって労することを命じられ、神によって休息することに召される。生きることをやめない。「死よ、おまえの勝利はどこにあるか」(I コリント15:55)。いつも全力をそそいで主のわざに励みなさい」(I コリント15:58)。そこでこそ、安息日は、主の日にかわったのである。イグナティウスは「もはや安息日のために生きるのではなく、主の日のために生きるのだ」(マグネシア人への手紙9:1, AD110頃)と語った。(未完)

参考文献

1. 大野恵正：出エジプト記釈義 聖書と教会 1974. 7月号～1975. 6月号)
2. 左近淑：旧約聖書における安息日 聖書と教会 1971. 9月号
3. 川島貞雄：新約聖書における安息日問題 同上
4. 田川建三：マルコ福音書上巻 1972年
5. H・ブラウン：イエス 1970年

On the Sabbath

Yukimaro AMAGAI

The Sabbath commandment is found in the Mosaic Law Ex. 20: 8-11 etc.

The Sabbath means that we should stop all work even though unfinished. This meaning and content of the idea certainly cannot be explained in terms of Babilonian or other non-Israelite traditions.

They are exclusively controlled by Israel's faith in Jahweh. In the New Testament scriptures the Sabbath is also regarded as a day of rest. All harvesting, including the plucking of ears (MK. 2: 23ff), is forbidden. The Pharisees object that by doing these things on the Sabbath the disciples were engaging in work. So the conflict between Jesus and his opponents about the Mosaic Law and its interpretations become more acute. Jesus proclaims that God gives to his creatures the eternal life. Our life needs God's rest as well as God's work. He knows our condition.

Judaism has similar-sounding sayings, but in such sayings the Rabbis are not in any way attacking the Sabbath commandment.